

OVERSEAS REPORTS

中国を訪ねて

佐々木和夫

広島大学工学部第三類応用化学
〒724 東広島市西条町大字下見
(1984年3月19日 受理)

China-wandering thought

Kazuo SASAKI

Department of Applied Chemistry,
Hiroshima University,
Saijo, Higashi Hiroshima, 724
(Received March 19, 1984)

昨秋11月、1ヶ月余にわたって武漢市にある華中工学院を訪ねた。“応用電気化学と金属腐食”学習討論班の講師として招かれたからである。

編集部からのご依頼は、中国の腐食研究事情を書けとのことだったがそれを書くほどの知識も情報も得て来なかった。不まじめと言えばそうだが中国滞在中から奇妙な心のわだかまりがあって、何も勉強しなかったのである。そのことを書いてみたい。

そこがどこであるかを問わず、外国を旅行することは楽しいものだ。未知の国を訪ね未知の人に会うことは不安でもあるが、不安もまた過ぎて見れば楽しみ以外のなものでもない。まして行き先が、かねて念願の中国とあれば、招待を受けた時のよろこびは一と入であった。“初夢は中国の野を駆け巡り”などと駄句をひねって家内中の失笑を買うほどの喜びようであった。

ところが今度の中国訪問の印象は少し様子が違っていた。北京に足を踏み入れた時から何となく感じ始めていたのだが、武漢に滞在中から帰国後の今日に至るまで、何か胸にわだかってすっきりしないものがある。それが何なのか自分でもよく判らない。

とに角その得休の知れないわだかまりのために、今度の中国旅行を手放して楽しいと言うわけにいかない。“中国はどうでしたか”と尋ねられる。“好かったですよ”と答える。“楽しかったですよ”とも答える、だがそこになにかもやもやしたものがある。何故なのかは判らない。まことに異様な経験である。

これを書くにあたって、いろいろと考えて見た。どうやら、わだかまりの原因は

「何故現在の中国がそこに存在するのか」

という、まるで禅の公案のようなものにとり憑かれて、

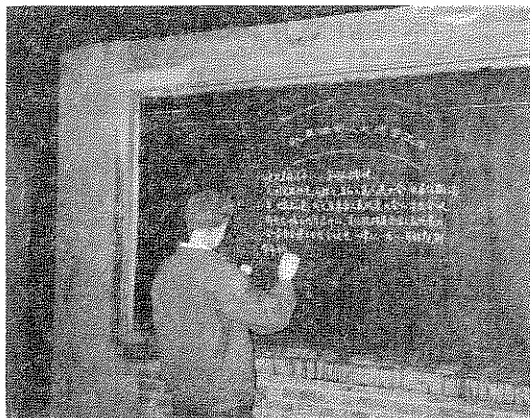


写真1 全国大会代表の直接選挙を真剣にやろうと訴える女性工作員（武漢鋼鉄廠にて）

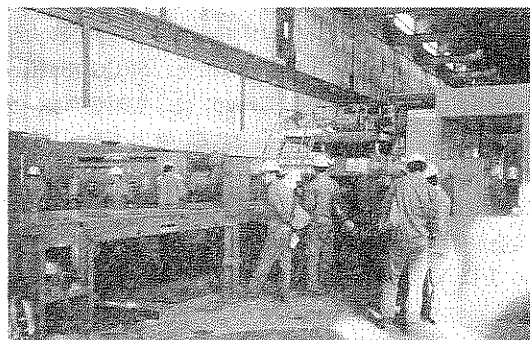


写真2 製鋼所に実習に来た学生

答えが出せずにいるかららしいと気がついた。

こんな馬鹿げた問題で貴重な紙面を費すのは、まことに気が負けるのだが、これを書かないことには先きに進めそうもないのでお詫しを乞いたい。

中国には、五千年とも言われる歴史があり、文明がある。少くとも戦前の中学を経験した我々以前の世代の者は、中国は欧米の諸国に対するとは別な感情、或る特殊な意識の対象であったし、現在もまたそうである。漢文は英数国漢と言われるほど重要な教科であったし、東洋史の99%は中国史であった。論語の片言隻句、李杜の詩の断片は日本人の教養の支えであったし、長城の偉業、華南の沃野、長江の悠久、すべては雄大であり畏敬と讃仰の対象でもあった。

だが、現実の中国はどうか。経済は遅れ、人々は街に溢れている。そこを訪れる人はなによりもまず、街を埋める群衆の数に圧倒される。私は単純な計算を試みた。中国の国土面積は台湾を含めて9億6千万平方キロ、日本の3千8百万平方キロの25倍である。人口比をざっと10倍とみても、中国の方が広い。砂漠など不

毛の地もあるだろうが、日本の可耕地は国土の15%と
言われるからどっこいどっこいだろう。とすれば、人々
が街に溢れる原因は単なる人口だけの問題ではないの
ではないか。中国人庶民の家屋を見て思ったのだが、中
国人にとって家庭（というより家屋）は団らんの場合
ではないか。睡眠と食事の場所ではないかではないか
とフト思った。これはおそらく長い歴史の間中、人
民が常に貧しかったことの帰結に違いない。高度な文
明をもち優秀な人間を多数抱え、国土も広大なのに人
民に貧しい暮らしを強いて来た3千年の長さをどう解
釈すればよいのか。それが不思議なのである。だから
こそ、解放戦争があり社会主義国として新生したのだ
ということ、私のもやもやに対する説明にはならな
い。解放に至るまで、何故3千年も要したのだら
う。それが疑問なのだから。

陳舜臣氏の書いたものを見ていたら、秦の始皇が
中国の統一に成功しなかったなら、中国は今頃ヨー
ロッパのような小国割拠の状態になっていたかもしれ
ぬとあった。これは私に奇妙な共感をよぶ。小国分
立とまで言わぬまでも、せめて数ヶ国の独立國家に
分立していたら、

その方が人民にとっては早く幸せが訪れたのでは
あるまいかと、いらぬお節介な考えにとり憑かれる。
何度も分立しながら結局は統一國家の形態を続けた
理由は何なのだろう。それも疑問である。

今、我々が中国を訪れると、それは敗戦直後の
日本におけるアメリカ人の立場に立つ。これは何とも
耐え難いことである。私が滞在中、落ちつかぬ気持
ちでいた大半の理由はこの点にある。その耐え難さ
がどうやら前に述べた禅問答を引き起したらしい
ことは疑いが無い。

なにはともあれ、中国は近代化を志向して着
実に前進中である。或る人の言うところでは、質を
言わなければ中国人の腹は膨れた。10億の民がと
に角餓えから解放されたのは文革後のホンのこの
頃のことですよとのことだ。

その人は、3千年の歴史の果てでやっと民衆が
餓えから解放された、この上は着実な経済力の向上
が来るのみだと言っているらしかった。それは勿論
そうだろう。そうあってくれなくては困る。そう
なった時の中国旅行はどんなに楽しいものだら
うか。